

日本の伝世ベトナム茶陶～施釉陶器の分類、年代観とその歴史的背景～

著者	西野 範子
雑誌名	周縁の文化交渉学シリーズ1 『東アジアの茶飲文化と茶業』
ページ	163-200
発行年	2011-03-31
その他のタイトル	Vietnamese Ceramics inherited for Tea-ceremony in Japan: Classification, Dating and the Background of the Asian Trade History
URL	http://hdl.handle.net/10112/4354

日本の伝世ベトナム茶陶

～施釉陶器の分類、年代観とその歴史的背景～

西野 範子

Vietnamese Ceramics inherited for Tea-ceremony in Japan:
—Classification, Dating and the Background of the Asian Trade History—

NISHINO Noriko

ベトナムの窯業村で生産された陶磁器が日本に渡り、茶道という文化的脈絡の中で使用された。所謂「安南」と呼ばれるそれらのベトナム陶磁器は、日本において今でも大切に伝世されており、近年では、伝世ベトナム茶陶と同類の陶磁器が発掘調査により出土している。

伝世茶陶および出土資料を包括的に分類し、筆者と西村昌也のベトナム陶磁の分類と編年研究（2005）から、生産年代を比定した。その結果、ベトナム産茶陶の生産年代を、14世紀、15世紀、16世紀前半、16世紀後半（第3四半期と第4四半期）、17世紀前期に分期し、各時期に関する茶陶がもたらされた国際交易の背景について明らかにした。また、朱印船貿易時代には、日本からベトナムへの注文生産が行われていたことが確実で、注文生産の仲介役に、和田理左衛門が関わった可能性について文献史と考古学的視点から論証した。

キーワード 安南焼、ベトナム陶磁、茶陶、朱印船貿易、鉢場（バッチャン）、和田理左衛門

はじめに

3-400年前のベトナムの小さな窯業村落で、当時の技術をもって生産された陶磁器が、船で日本に運ばれることによって、時の権力者が情念を持って珍重した高級な茶陶となった。それらの茶陶は現在までも大切に保管され、その伝来については、箱書等から理解することが可能なものも多い。これらのベトナム産茶陶をとりまくベトナムおよび日本の歴史的環境を考えながら、生産年代や流通、使用といった問題について、本稿で論じてみたい。

ベトナム産の茶陶に関しては、すでに満岡・西田(1984)¹⁾、西田(1993)²⁾、林屋(1995-96)³⁾、Cort(1997)⁴⁾、赤沼(2002)⁵⁾などの研究論文があり、根津美術館と茶道資料館では東南アジア産の伝世茶陶を精力的に集め、それぞれ1993年、2002年に展覧会が開催された⁶⁾。他、町田市立博物館、愛知県美術館、徳川美術館なども、所蔵する伝世ベトナム陶磁を紹介している⁷⁾。各図録には、展示品一点ずつに対し、伝来、箱書、釉調、文様、胎土、重ね焼き痕、請来年代、年代、注文品かどうかの指摘等、詳細な解説が記載されている。しかし、日本伝世のベトナム陶磁を包括的に分類し、年代比定を行った上で茶陶の背景を捉える研究はなく、それゆえ上述の研究は、陶磁器の年代比定に1世紀から2世紀の年代幅を持たせて論ぜられてきた。

筆者らはベトナム国内外の発掘資料や表採資料を包括的に分析し、型式や示準資料を参照にして編年案を提示することで、各陶磁器に対して、25~50年単位で年代を与えることを可能にした(西村・西野, 2005⁸⁾；以下、西村・西野分類と略称)。この編年研究を基盤にし、茶陶として伝世するベトナム陶磁器の年代を分析することで、今までに明らかにされなかった新しい結論を提出する。

伝世のベトナム茶陶には、所謂「安南焼」とよばれる陶磁器と、「南蛮」と呼ばれる焼締陶がある。この2種は用途が異なり、「安南焼」は陶磁器自体が商品であったのに対し、焼締陶「南蛮」は、主に、商品運搬のための容器として使用した後、転用されて茶陶となったものである⁹⁾。本稿では、前者を中心に論じ、焼締陶については別の機会にしたい。本論文では伝世茶陶(施釉陶磁器)66点を分類の対象とした。

本稿は3章で構成され、第1章で、伝世ベトナム茶陶の分類と年代観を提示し、第2章で、日本出土

-
- 1) 満岡忠成・西田宏子「南海陶磁と日本」『世界陶磁全集16 南海』(小学館, 1984) 236-253頁。
 - 2) 西田宏子「南蛮・島物——南海請来の茶陶——」『南蛮・島物——南海請来の茶陶——』(根津美術館, 1993) 109-124頁。
 - 3) 林屋晴三「茶の湯の場における請来陶磁と和物陶磁の交流」『東洋陶磁』vol.25(東洋陶磁学会, 1995-96) 39-47頁。
 - 4) Louise Allison Cort Vietnamese Ceramics in Japanese Context, *Vietnamese Ceramics A Separate Tradition*, (Art media Resources. John Stevenson and John Guy ed1997) 63-83頁。
 - 5) 赤沼多佳「伝世品に見る南蛮茶道具の様相」『平成14年秋季特別展「わび茶が伝えた名器 東南アジアの茶道具」』(茶道資料館, 2002) 150-159頁。
 - 6) それらの展覧会の図録には、根津美術館『南蛮・島物——南海請来の茶陶——』(根津美術館, 1993)と茶道資料館『平成14年秋季特別展「わび茶が伝えた名器 東南アジアの茶道具」』(茶道資料館, 2002)がある。
 - 7) 徳川美術館『新版徳川美術館蔵品抄④茶の湯道具』(徳川美術館, 2000)、町田市立博物館『ベトナムの青花——大越の至上の華——』(町田市立博物館, 2001)、愛知県陶磁資料館学芸部学芸課『茶陶 木村定三コレクション』(愛知県美術館, 2006)等の図録が出版されている。
 - 8) 西村昌也・西野範子「ヴェトナム施釉陶器の技術・形態的視点からの分類と編年——10世紀以降の施釉碗皿を中心に——」『上智アジア学』23号(上智アジア学会, 2005) 81-122頁。西村・西野分類は、発掘で出土例の多い碗皿が中心であり、碗皿に関しては詳細な年代観を与えることが可能である。その他の器種に関しては、認識している年代幅が碗皿ほど細かくはない。
 - 9) 焼締陶器の中でも、建水に使用されるミースエン窯産の窯は建水に見立てられ商品としてもたらされたと考えられている。森村健一「15-17世紀における東南アジア陶磁器からみた当時の日本文化史」『国立歴史民俗博物館研究報告第94集 陶磁器が語るアジアと日本』(吉岡康暢編, 2002) 251-275頁の263頁。

の茶陶を分析し、第三章で、所有者や伝来過程、歴史資料を参照にしてベトナム茶陶の生産や流通背景の復元を試みる。なお、この研究は既公表論文¹⁰⁾から発展させたものである。

論文の中では、すべての陶磁に対して写真・図版を掲載することができなかったので、引用した陶磁器の出典に関して、下記（→枠内）のように出展を省略記載した。

長谷部楽爾 1972年『原色日本の美術29 請来美術（陶芸）』小学館 → 原色：図録番号

三上次男編 1984年『世界陶磁全集16 南海』小学館 → 南海：図録番号

福岡市美術館 1992年『ベトナムの陶磁』 → 福岡：図録番号

根津美術館 1993年『南蛮・島物——南海請来の茶陶——』根津美術館 → 根津：図録番号

徳川美術館 2000年『新版徳川美術館蔵品抄④茶の湯道具』 → 尾張徳川：図録番号

町田市立博物館 2001年『ベトナムの青花——大越の至上の華——』町田市立博物館 → 町田：図録番号

茶道資料館 2002年『平成14年秋季特別展「わび茶が伝えた名器 東南アジアの茶道具」』茶道資料館
→ 茶道：図録番号

愛知県陶磁資料館学芸部学芸課 2006年『茶陶 木村定三コレクション』愛知県美術館
→ 木村定三コレ：図録番号

第1章 伝世ベトナム茶陶の分類

1-1. 分類の基準

まず、茶陶として伝世したベトナム陶磁器を、器形、高台型式、文様、釉調、重ね焼き技法などから分類した。分類手法は、筆者らの既出分類案（西村・西野分類）と異にしないが、伝世品は完形資料であり、陶磁器の口縁形から高台形までの全形を理解するという点において、高台資料だけよりも当然ながら情報量が多い。また、茶陶として運ばれたベトナム陶磁には、ベトナム国内でもまだ出土例のない珍しい陶磁器も多い。よって、伝世陶磁器の中での分類を試みることにした¹¹⁾。

また、年代区分については、100年間を2分割する場合「前半」「後半」、3分割する場合「前期」「中期」「後期」、4分割する場合「第1四半期」～「第4四半期」と記述する。

1-2. ベトナム茶陶の分類

最初に、器種（茶碗、建水、皿、深鉢、平鉢、盃台、水指、水注、花入、茶入）で分類し、型式や製作技術で細分した。茶道界の器種名は、筆者らの分類器種呼称と異なっている。例えば、「茶碗」に「甌（深鉢）」が含まれ、「建水」と「短銅桶」、「水指」と「広口壺」、「茶入」と「小壺」というような違いが

10) Nishino Noriko *Niên đại và vị trí của gốm sứ Việt Nam được sử dụng trong trà đạo Nhật Bản*—Căn cứ vào nghiên cứu gốm sứ Việt Nam những năm gần đây qua phương pháp Khảo cổ học, Văn Hóa Phương Đông Truyền thống và Hội nhập, (Nhà xuất bản Hà Nội, trường đại học khoa học xã hội và nhân văn 2007) 427-432頁。

11) 但し、筆者は伝世品を実見したわけではなく、図録などの写真資料からの研究を中心とする。よって、成形技法など、詳細に観察できなかったものに関しては、図録の説明書きを参照にした。

ある。しかし、器形分類の枠組みとしては一致するため、茶道界での呼称を分類の大枠として用いた。また、陶磁器の呼称として、茶道界で用いられる「安南」や「染付」は、考古学では「ベトナム」、「青花」という用語を用いることが多い。できるだけ名前から陶磁器そのものが思い描ける呼称を用いるのがよいと判断し、茶陶関係については、茶陶に呼称された呼び名で記載した。考古学的脈略で出土したベトナム陶磁のみ、考古学で普段使用している用語を用いた。

1. 茶碗

茶碗 A 類¹²⁾ (14世紀半ばから後半)

茶道73 安南白釉茶碗 (図1)

根津96 安南白釉茶碗

外面体部にヘラ削りで蓮弁文が描かれる。2点の高台型式は少し異なるが、14世紀半ばから14世紀後半に位置づけられる白磁筒型深鉢である。見込みには「茶道73」に目跡が3点、「根津96」には目跡が4点あるというが、写真で提示されておらず、その形などは不明である¹³⁾。ベトナムでは、Âu (甌) と呼ばれ、比較的よく見られるタイプである。



図1 茶碗 A 類

「茶道73」(図1)は、小堀遠州(1579-1647)の所持品である¹⁴⁾。遠州は15歳ごろより古田織部から茶道を習い始め、21歳の時に伏見六地藏屋敷にて、本人にとって最初と思われる茶会を催していることから、17世紀前半にこの茶碗を所持していたことになろう。「根津96」は「遠州蔵帳」記載の茶碗で、内箱蓋表に遠州が「烏子手 唐茶碗」と記す。神尾蔵帳¹⁵⁾に記されており、小堀権十郎の筆で「唐茶碗」と記している¹⁶⁾。小堀権十郎が遠州の三男であること、神尾元勝(1591-1667年)は遠州に茶を習ったことから、この茶碗も「茶道73」と同様に小堀遠州と関連があるのは間違いないだろう。

茶碗 B 類 (15世紀末)

根津91 安南染付花唐草文茶碗 (図2) 根津美術館蔵

普通の碗より高い高台をもつもので、「高足碗」と筆者らは仮称している。西村・西野分類の輪状の釉剥ぎH-3類もしくはH-4類と同類である。ベトナムでもよく出土するタイプであり、ハイズオン省ゴイ窯で同類陶器の生産が確認されている(図3)。菊花花芯を渦巻き文で描き、唐草文のツタは枝分かれ

12) 茶碗 A 類は、ベトナムでは Au (甌) と分類されており、西村・西野分類には含まれていない。

13) 14世紀の年代を持つ目跡は三角形をしている。

14) 茶道資料館「図版解説」『平成14年秋季特別展「わび茶が伝えた名器 東南アジアの茶道具」』(茶道資料館, 2002) 255頁。

15) 蔵帳のひとつ。「神尾家御道具帳」とも、「神尾備前守蔵帳」とも言われる。井口海仙、末宗廣、永島福太郎監修「神尾蔵帳」「神尾元珍」「神尾元勝」『原色茶道大辞典』(淡交社, 1975) 223頁

16) 西田宏子・鈴木裕子「図版目録」『南蛮・島物——南海請来の茶陶——』(根津美術館, 1993) 196頁。

が少なく簡単なタッチで2筆もしくは3筆のみで描かれ、葉は筆を上下に振って描かれる。碗内面の口縁下部の文様帯は、筆で押しただけの単純な文様である。ホイアン沖沈船¹⁷⁾（15世紀第三四半期）の文様と比較して、簡略化されていることが明らかである。また、器形的には「福岡80」や「福岡81」と類似するが、茶碗B類→「福岡80」→「福岡81」の順に体部下部が膨らみを持ち、口縁部に向かって垂直に立ち上がるように変化しており、時期的変化に対応すると考える。「福岡81」の文様は、クランアオ沈船出土の青花壺（図4）や湧田古窯跡五彩碗¹⁸⁾の文様と類似する¹⁹⁾。以上のことから、茶碗B類には15世紀第4四半期の年代を与えたい。



図2 茶碗B類



図3 茶碗B類参考
ハイズオン省ゴイ窯址出土



図4 茶碗B類参考
クランアオ沈船出土



図5 茶碗B類参考 沖縄湧田窯出土

茶碗C類（16世紀前半から半ば）

根津108 安南染付蓮弁文茶碗（図6） 松井文庫蔵

「高台部が揺られている²⁰⁾」。高台接地部を堅いやすり状の工具で揺って平らに削ったのだろうか。ベトナムでは、高台部が揺られたものはまだ確認されていない。しかし、この陶磁器に描かれた文様は、ベトナムの同時期流通品に普遍的である。文様は、西村・西野分類の輪状釉剥ぎH-4類に属する図7を簡略化したものである。ホイアン沖沈船資料にも口縁部下部の外面の×と点々の文様は存在するが、

17) 1997年5月から1999年6月まで、クアンナム省ホイアン沖のクーラオチャム沈没船から多量の陶磁器が収集、発掘された。出土資料については、Nguyễn Đình Chiến, Phạm Quốc Quân Gốm sứ trong năm con tàu cổ 2008や Butterfields *Treasures from the Hoi An Hoard Important Vietnamese Ceramics from a Late 15th /Early 16th Century Cargo* (2000) のサンフランシスコとロサンゼルスにおける展示図録（競売用）に紹介されている。

18) 長嶺均「第V章出土遺物」『沖縄埋蔵文化財調査報告書第111集湧田古窯跡（I）——県庁舎行政棟建設に係る発掘調査——』（沖縄県教育委員会、1993）：85頁

19) 筆者の年代観は、「ホイアン沖沈船（15世紀第3四半期）→湧田古窯赤絵碗（1500年前後）→クランアオ沈船（16世紀前期）」である。

20) 西田宏子・鈴木裕子 前掲注16) 200頁。



図6 茶碗C類

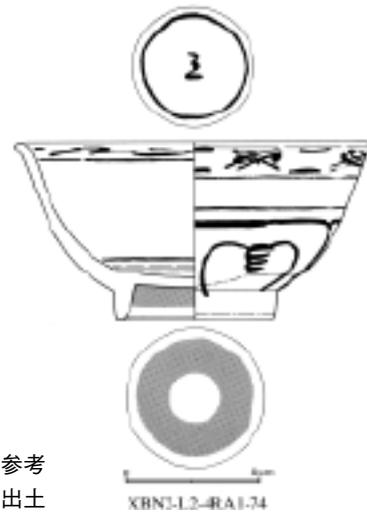


図7 茶碗C類参考
ナムディン省バックコック・ソムベング地点出土

図7は、より簡略化され、当類は図7例をさらに簡略化したものである。ホイアン沈船よりも二段階ほど後出する資料となる。よって、16世紀前半から半ばに位置づけられるであろう。

この茶碗は熊本県の松井文庫所蔵である。松井家は代々、肥後細川藩の筆頭家老を務め、細川家とともに文化芸能に造詣深い家柄で、初代・康之は千利休の高弟で茶道に秀でていた。八代城は八代海に面し、海を渡れば天草諸島、長崎などとの交通にも便利であり、立地から海上交易で栄えたことを伺わせてくれる。

茶碗D類（16世紀前半から半ば）

南海318／根津97 安南白釉茶碗 逸翁美術館蔵

根津98 安南白釉碗

この類型は、器形的には、西村・西野分類の輪状の釉剥ぎH-4類にみられるような、体部下部の膨らみや口縁部に向かって体部がやや垂直に立ち上がる形態に類似するが、高台が高いものではない。よって、輪状の釉剥ぎH-4分類に後出するタイプであり、I-1類の前もしくは同時期に位置づけられ²¹⁾、16世紀前半から半ばの年代と比定できる。ベトナムで一般的に流通している（図8）。「南海318／根津97」の外は無文であるが、内面には、見込みに円圏線が2本入る。「根津98」は外面および内面にも呉須圏線が描かれる。双方、器形および製作技術が同じである。「無地安南といわれる茶碗で伝世するものは不思議に同じような形をしていた²²⁾。」とあるように、このタイプの碗が好んで選ばれ、日本に持ち帰られたのだろう。「根津98」は片桐石州（1605



図8 茶碗D類参考ナムディン省
バックコック・ソムベング地点出土

21) 西村・西野 前掲注8) の分類の中で、16世紀の年代に関しては細分を要する部分である。

22) 西田宏子・鈴木裕子 前掲注16) 論文, 196頁。

-1673) が所持していた。

茶碗 E 類（15世紀後期から16世紀初頭）

根津95 安南色絵花文茶碗

器形から判断すると、高足碗である西村・西野分類の輪状釉剥ぎ H-3 類に近く、年代は15世紀後期から16世紀初頭に位置づけられる。文様が非常に珍しいもので他に類を見ない。柳営御物²³⁾。黒塗りの外箱蓋表に、金粉字形で「台徳院様ヨリ御拝領紅安南」蓋裏金粉字形権現様御遺物／駿府御分物之内」と記される。

茶碗 F 類（16世紀中期）

原色109／南海319／根津94／茶道72／尾張徳川69 紅安南茶碗（図9） 徳川美術館蔵

この茶碗も高足碗であるが、このタイプの高台形はベトナムで出土例がまだない。また、文様も他の類例を見たことがない。茶碗 F 類は、B、E 類よりも体部下部が膨らみ、高台部が内側に窄む逆台形である。後出する茶碗 I 類とは異なるという形態差が読み取れる。碗全面に文様を配置する点や、器形から17世紀には下らない。また17世紀以降には赤の顔料は用いられなくなる。非常に位置づけの難しい資料であるが、茶碗 B、E 類よりも後出し、茶碗 I 類よりは遡ると考え、16世紀中期に位置づけておきたい。尾張徳川家に伝来している。



図9 茶碗 F 類
(カラー図版170頁も参照)

茶碗 E、F 類はともに非常に珍しい文様で、今回確認できた茶陶ベトナム陶磁の中で、色絵茶碗は、唯一上記 2 点のみで、他には茶入れが 1 点確認できるのみである。また、2 点とも徳川家が所蔵していることから、「紅安南」と呼ばれたこの 2 点は、大変珍重され、当時の最高権力者が所持するような高級品であったことが伺える。

茶碗 G 類（16世紀後半）

町田105 染付菊唐草文茶碗（図10）

大阪市立美術館蔵（田万コレクション）

先に直線で区画し、ラマ式連弁の描き方、内面口縁下の文様が小さい丸で表現されているという点等において、非常に珍しい。体部下位は張り、口縁径が広く、器形的にも非常にめずらしく、年代の位置づけが難しい資料である。見込みに輪状の釉剥ぎがあり、高台内が確認できないが、西村・西野分類では、高足碗である輪状の釉剥ぎ H-4



図10 茶碗 G 類

23) 徳川将軍家に所蔵された名物道具。家康の修蔵が基礎となり家光の時代に膨張した。(井口海仙監修, 1975「柳営御物」『原色茶道大辞典』淡交社: 938。)



図9 茶碗F類 紅安南茶碗 徳川美術館蔵



図63 鉢場（バッチャン）社阮氏家譜
北国日本人（和田）理左衛門と著



図41 水指B類 安南紋手獅子文耳付水指

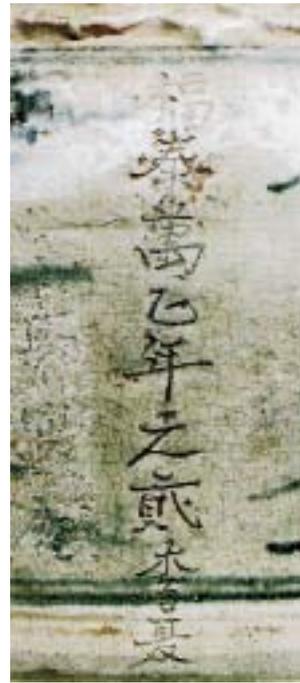


図42 参考資料 燭台 右上「福泰萬々年之貳季夏」
右下「嘉林縣鉢場社裴富多造」

類に近い。体部下位が張る、ユニークな文様という点において、16世紀前半のベトナム陶器群よりも年代が下る傾向がみられ、16世紀後半に位置づけておく。

茶碗H類（17世紀前半）

根津107 安南染付鳥文茶碗（図11） 根津美術館蔵

この茶碗も珍しい資料で、年代比定が難しい。見込みに輪状の釉剥ぎがある。器形は、輪状の釉剥ぎH-3、4類のような高足碗の高台成形技術の同じ系譜上に位置づけられるが、器形や呉須のにじみ方は17世紀前半のものに類似するので、同時期に位置づけておきたい。

朽木植昌伝来品。朽木植昌は1643年に生まれ、1714年に死亡。1660年より茨城県土浦藩主、1669年より丹波福知山藩主であった。



図11 茶碗H類

茶碗I類（16世紀後半）

根津92 安南染付花唐草文茶碗 根津美術館蔵

根津110 安南染付花文茶碗 根津美術館蔵

町田106 安南染付人物文碗「大越国」銘（図12）（財）大和文華館蔵

根津93 安南染付大越文字茶碗

このタイプの碗も非常にめずらしい。高台は高く作出され、実見できていないが記述からは、重ね焼き痕をもたない。高台の製作技術や器形は、図14（輪状の釉剥ぎH-4類）と類似するが、このタイプの碗は、体部に膨らみをもたせ、口縁部が垂直に立ち上がり、碗の体部は高く作出される。文様の割り付け方法が図14と類似すれども、各モチーフの形がそれぞれ異なる。「根津110」の蔓草文のモチーフは、図18（ハイズオン省のゴイ窯址出土碗：16世紀半ば）の蔓草文を形式化、企画化したものであり、また、図12（町田106）の人物画も、図13（ゴイ窯址出土碗：16世紀半ば）の人物文と類似している。この類型に属する4碗の蓮弁内のパルメット文は小さな渦卷きを横に二つならべ、その下に再度渦卷や半円が描かれている。一度筆を離して描く蓮弁内の花卉文様の描き方は、図15（ゴイ窯出土皿）や図16（延成萬々（1578-1585）年の記念銘をもつ燭台²⁴⁾）に類似する。「根津92」の高台外側の半円を重ねる文様は、図15の見込みにも確認できる。



図12 茶碗I類



図13 茶碗I類参考
ハイズオン省ゴイ窯址出土

この類型に属する4点の伝世茶碗は形態や文様の割り付け方法に非常に強い共通性があり、年代的幅はそれほどないものと思われる。上述したゴイ窯址出土の青花文碗の後に位置づけられるものであるが、

24) Nguyễn Đình Chiến *Cẩm Nang Đồ gốm Việt Nam có minh văn thế kỷ XV-XIX*, (Viện bảo tàng, lịch sử Việt Nam 1999) 120 頁, N8)



図14 茶碗I類参考
ハイズオン省バックニン省ファーホー遺跡採集品

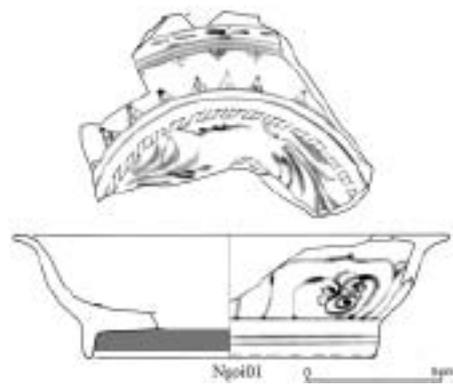


図15 茶碗I類参考
ハイズオン省ゴイ窟址出土

どのくらい後に位置づけられるのかが問題である。また、「延成萬々年」銘記燭台の文様との類似性を考えると、16世紀後半に位置づけておきたい。この類型の碗は、モチーフ的には、ベトナムのものしかみられず、注文生産ではないと考える。また、図12の碗体部にはコバルトで「大越国」と書かれている。1174年から1803年まで、中国歴代王朝によるベトナムに対する正式な呼称は「安南」であった²⁵⁾が、自称するときは「大越」と呼んだ²⁶⁾。



図16 茶碗I類参考
燭台「延成萬々年之初三月三十日黃造福寧」

茶碗J類（16世紀後半）

- 根津111 安南染付壽字茶碗（図17） 永青文庫蔵
- 根津112 安南染付長字文茶碗 不審庵蔵
- 根津113 安南染付藤花文茶碗

「根津111」（図17）は高台が削られているが、もとは「根津112」「根津113」と同じような高台作りであったと思われる²⁷⁾、残存部の施釉範囲のありかたからも、凹凸のある高台であったと考える。葉文は図18から変化し、茶碗I類の根津110 安南染付花文茶碗と非常によく



図17 茶碗J類

25) 和田正彦「安南」『ベトナムの事典』（同朋社、1999）70頁。

26) ベトナムの民族主義を語る際、必ず引用される文章に、黎利の参謀役阮鷹の手になる独立宣言「惟うに我が大越は文獻の邦たり……」がある（八尾隆生「黎初ヴェトナムの政治と社会」（広島大学出版会、2009）5頁。しかし、朱印船貿易時代には、トンキン（東京）鄭氏も広南阮氏も共に「安南」の国号を用いて徳川将軍に国書を送っている（永積洋子「17世紀中期の日本・トンキン貿易について」『城西大学大学院研究年報』第8号、（城西大学大学院経済学研究科、1992）22-23頁。

27) 西田宏子・鈴木裕子 前掲注16) 201頁

類似することから、16世紀後半に位置づけられる。

「根津113」の様子は、九州陶磁文化館 No.84の染付欧字文ガリポット²⁸⁾に描かれた草の文様に類似し、西洋のモチーフ起源と推測できる。高台部に凹凸をつけて成形し、「根津113」の外面部部に凸線が作出される点も非常にめずらしい。

「根津112」は、如心斎（1705-51年）が箱書する。

茶碗 K 類（17世紀前半）

伝世茶碗の中では、このタイプが最も多く、11点確認できた。そのため、器形、呉須、文様で茶碗 K 1 類と茶碗 K 2 類に細分することが可能となった。

茶碗 K 1 類

根津101／茶道76 安南染付絞手蜻蛉文茶碗 北村美術館蔵
 南海320／根津100 安南染付絞手蜻蛉文茶碗（図19）

根津美術館蔵

根津106／茶道77 安南染付絞手蜻蛉文茶碗 孤篷庵蔵

根津104／茶道78 安南染付絞手海老文茶碗（図20）

大樋美術館蔵

根津105 安南染付絞手文字入り茶碗

根津102 安南染付絞手蜻蛉文茶碗

根津103／尾張徳川70 安南染付絞手蜻蛉文茶碗 徳川美術館蔵
 茶道80 安南染付絞手茶碗



図19 茶碗 K 1 類



図20 茶碗 K 1 類



図18 茶碗 J 類参考
 ハイズオン省ゴイ窯址出土



図21 茶碗 K 1 類参考
 長崎市金屋町遺跡出土

28) 九州陶磁文化館『開館10周年記念 海を渡った肥前のやきもの展』（九州陶磁文化館，2000）74頁。

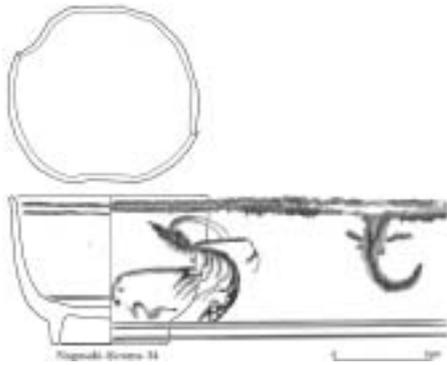


図22 図21資料の実測図

茶碗 K 2 類

茶道74 安南染付鳳凰文茶碗（図23）

茶道75 安南染付鳥文茶碗（図24）

木村定三コレ75 安南遊漁文茶碗（図25）

愛知県美術館（木村定三コレクション）蔵

茶碗 K 類は、高台接地部以外全面に施釉され、体部下位に膨らみをもち体部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。口縁部は外反しない。高台型式では、西村・西野分類、円盤形トチン B-5 類に所属するものである。円盤形トチン B-5 類は細分が可能であり、K 類は円盤形トチン B-5 類のなかでも初期に位置づけられ、17世紀前半に位置する。内面の重ね焼き痕は、「根津103」と「茶道80」のみに3点の目跡が確認されている。K 1 類に関しては、使われている文様がベトナム出土品には見られない。成形後に碗を指で凹ませて口縁部円形を歪ませるなど、茶人好みの作風であり、この高台型式において器体上部が筒形に近い器形は、ベトナム出土品にはない。従って、多くの研究者が指摘したように、注文生産品であることは間違いない。また、文様や器形などから陶工への注文が細部にわたっていたと理解できる。長崎市金屋町出土の茶碗（図21、22）は、図20と類似する。伝世茶碗と同類品の発掘例はこの1点のみである。

茶碗 K 2 に関して、文様の自体はベトナム的であるが、図23と図25は高台部を半円形に切り落としていた。日本で17世紀前期に流行った割高台を注文したのだろう。

器形は、茶碗 K 2 類のほうが K 1 類より腰部に丸みをして口縁に向かって立ち上がる。文様や装飾は、茶碗 K 1 類に、蜻蛉や海老などの限られたモチーフが使用されるのに対して、茶碗 K 2 類には、ベトナム出土陶磁器にも見られるモチーフが使用されている。また、茶碗 K 2 に描かれた圏線は施釉されない部分において褐色に発色する。茶碗 K 1 類と K 2 類の差異は生産地の違いによるものと考えられる。



図23 茶碗 K 2 類



図24 茶碗 K 2 類



図25 茶碗 K 2 類

茶碗L類 (17世紀前半)

根津99 安南染付筋文茶碗 (図26) 永青文庫蔵

この類型の碗は、ベトナムでもよく見られるものだが、当時の高級品であり、出土例は多くない。図27²⁹⁾と類似する。中国陶磁を模倣しているが、中国陶磁には漢文が文様的に描かれており、ベトナムでは点文や+文に置き換えられている。高台接地部は低く揺られ、輪状の釉剥ぎをもつという³⁰⁾。施釉技法、文様から、17世紀前半に位置づけられる。細川家伝来。



図26 茶碗L類



図27 茶碗L類参考

茶碗M類

茶道79 安南絞手船人物茶碗 (図28)

木村定三コレ74 染付船頭文碗 (図29)

愛知県美術館 (木村定三コレクション) 蔵

南海 Fig.159 安南染付舟人物文碗

高台部が高く台形状に裾広がりに成形されており、ベトナムで確認したことがない大変珍しいタイプである。この類型の陶磁器は3点とも、舟文が描かれている。この舟文はベトナムの典型的な小舟であり、図30³¹⁾や図31³²⁾等のように他のベトナム陶磁にも見られる。しかし、茶碗M類の場合、非施文部を大きく取り、珍しい高台形を持つことから、注文生産の可能性があろう。



図28 茶碗M類



図29 茶碗M類

29) Bui Minh Tri and Kerry Nguyen Long *Vietnamese Blue and White Ceramics* (Sochial sciences Publishing House, 2001) 437項, no.310)

30) 西田宏子・鈴木裕子 前掲注16) 197頁。輪状の釉剥ぎであるならば、西村・西野 2005分類の輪状の釉剥ぎの新しい類型に加えなければならない。

31) Bui Minh Tri and Kerry Nguyen Long 前掲注29) 405頁, no.266

32) Bui Minh Tri and Kerry Nguyen Long 前掲注29) 434頁, no.306



図30 茶碗 M類参考 舟文碗



図31 茶碗 M類参考 舟文深鉢

茶碗 N類

ワシントン美術館所蔵 F1897.62

西村・西野編年の円盤形トチン B-3 もしくは C-1 類に属し、16世紀末から17世紀前期に位置づけられる。Yamanaka and Co. (山中商会) よりチャールズ・フリーヤーが1897年に購入したものであり、日本に新品で購入され、明治時代まで茶碗として用いられたと考えられる (Louise Cort 私信)。現在のところ1点のみ確認されており、製作年代が16世紀末あるいは17世紀前期かで、茶碗が日本にもたらされた背景解釈が変わるところである。

2. 建水

根津125 安南染付魚文建水

建水は1点のみ確認されている。口縁が釉剥ぎで、見込みに目跡が三点ある。内側にトチンを載せて小さい陶磁器を入れて、口縁同士を重ね、焼成したと考えられる。外面口縁下の突帯は、茶碗 M類の「根津113」安南染付藤花文茶碗や、水指 B類の安南染付龍文耳水指、水指 C類の「茶道81、82」安南絞手耳付水指、花入でも見られる。この器形には、ベトナムの焼締陶に「寸銅鉢」があるが、施釉陶器での確認例はまだない。

3. 皿 (17世紀前期)

南海325 染付蜻蛉文皿

南海327 染付鹿文輪花皿

南海329 染付笠文皿 (図32) 静嘉堂文庫美術館蔵

根津137 安南染付絵替菊形皿 五枚

木村定三コレ77 安南染付蜻蛉文輪花皿 (図34)

愛知県美術館 (木村定三コレクション)

9枚の皿が確認されている。口縁装飾や文様にバリエーションがあるが、直径19cm前後という共通したサイズで造られている。懐石料理に用いるために、同一サイズを要したのだろう。これら

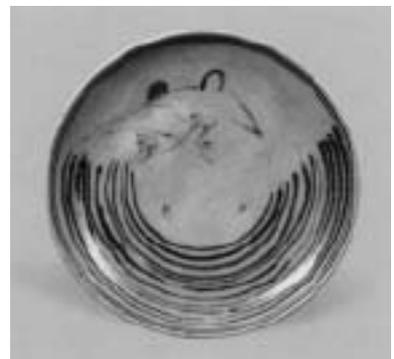


図32 染付笠文皿

も、ベトナムでは類例のないものであり、注文生産であろう。第2章で論ずるように京都、堺、大阪、



図33 染付笠文輪花皿
長崎市金屋町遺跡出土

長崎で出土している。出土資料には、龍文が描かれるものが多い。図32（「南海329」）の笠文は、文様の割り付け方は異なるが、金屋遺跡出土染付皿（図33）にも見られる。

4. 鉢

安南326 安南染付菊花唐草文鉢（図35）

静嘉堂文庫美術館蔵

この鉢も1点しか確認例がなく非常に珍しい。輪状の釉剥ぎを持ち、底部に鉄渋が施され、口縁部が一カ所のみ指で凹まされている。注文生産であろう。

5. 平鉢（17世紀前期）

茶道93 安南絞り手平鉢

南海328 安南染付雲龍文獣足平鉢（図36） 静嘉堂文庫美術館蔵

個人蔵（図37）

木村定三コレ76 安南染付鼓形平鉢（図38） 愛知県美術館（木村定三コレクション）蔵



図34 染付蜻蛉文輪花皿



図35 染付菊花唐草文鉢



図36 染付雲龍文平鉢

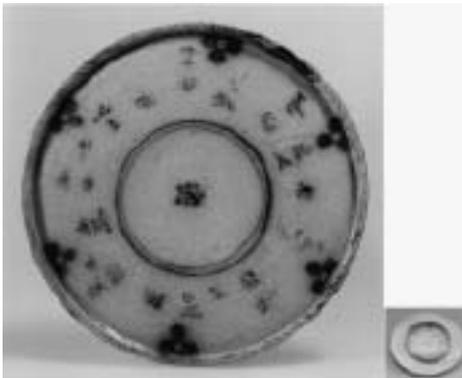


図38 平鉢



図37 染付平鉢

この平鉢は懐石の折に焼物鉢として好まれた³³⁾。「南海328」の直径が24.1cm、「茶道93」が直径21.1cmと大小あれども、文様の割り付けや器形を同じにして造られている。4点全てに共通する口縁部外周の三つの丸文は陶磁器の文様としては珍しく、家紋であろうか。暈付のみ露体であるのは、17世紀以降の碗皿に確認できる施釉方法である。図36の見込みの文様は、平鉢のほうが丁寧に描かれてはいるが、次章で述べる長崎金屋遺跡や京都、堺で出土した皿の龍文と類似する。施釉方法、龍文の様式から、17世紀前期に位置づけて問題ないだろう。

6. 盃台（17世紀前期）

茶道92 安南染付龍文盃台

盃台も1点のみ確認されており、非常に珍しい。口縁部平面に点文を施し、内面の際に圈線を施すなどの点で、上述した平鉢に類似する。年代も同時期に推定しておく。

7. 水指

水指の伝世例も多く、今回12点確認できた。器形からA、B、C、Dの4類に分類した。

33) 茶道資料館 前掲注14) 260頁。

水指 A 類 (14世紀)

肩に蓮弁が凸文で施される筒型の蓋付き陶器で、ベトナムでは蔵骨器として使用されることがある³⁴⁾。透明釉が施される。

「根津57／茶道85」 安南蓮弁文水指 (図39) 京都国立博物館蔵

「原色96／根津68／南海 p315Fig.156」 安南黄白釉水指

根津美術館蔵

「南海316」 黄白釉蓮弁文耳付水指

図39 (「根津57／茶道85」) は、大沢家が所有していたものである。

大沢家当主は平次平蔵の船長として乗船して、1633年に渡越してい

るので、その頃、持ち帰ったものと理解されている。「原色96／根津68／南海」、「南海316」は非常に類似した資料であり、双方は「根津57／茶道85」よりも肩部に膨らみをもつが、口縁部型式、貼り付け蓮弁文は類似しており、陳朝期に位置づけられる資料である。



図39 水指 A 類

水指 B 類 (17世紀前期)

水指 B 類は、筒型を基本とした蓋付きの容器で、外面には獅子や龍などを貼花文で施し、飛雲や珠文を染付で残りの空間に余白をもたせて描かれる。

茶道83 安南絞手獅子文耳付水指

茶道84 安南絞手獅子文耳付水指 (図41)

根津71 安南染付龍文双耳水指 根津美術館蔵

南海322／根津72／茶道87 安南 絞手龍文耳付水指 (図40)

京都国立博物館蔵

原色108／根津70 安南染付雲文龍文耳水指

妙心寺桂春院蔵

「茶道83」と「茶道84」(図41)は獅子の貼花文を持つが、この獅子文を作った型と類似した型で成形した獅子文が、「福泰萬々年之式季夏 嘉林縣鉢場社裴富多造」と刻まれる燭台に貼り付けられている(図42³⁵⁾)。この燭台は1643-1649年に嘉林縣鉢場社の裴富が造っている。この燭台に貼り付けられた蓮弁文も「茶道83」の胴部の蓮弁文と同じである。この蓮弁文と同様の文様が、「香跡寺細字甲午年十一月十六日造 順安府嘉林縣鉢場社裴富造作」の燭台にも見られ、1654年に同じく裴富が造っている³⁶⁾。陶器製作用の型は数十年間使用できるので、獅子貼花文の型の使用年代を1640年代の前後10年、つ



図40 水指 B 類



図41 水指 B 類
(カラー図版171頁参照)

34) 陳朝期は禅宗をはじめとする仏教がさかんな時代であった。

35) Nguyễn Đình Chiển 前掲注24) 169頁, N82。

36) Nguyễn Đình Chiển 前掲注24) 168頁, N83, 84。

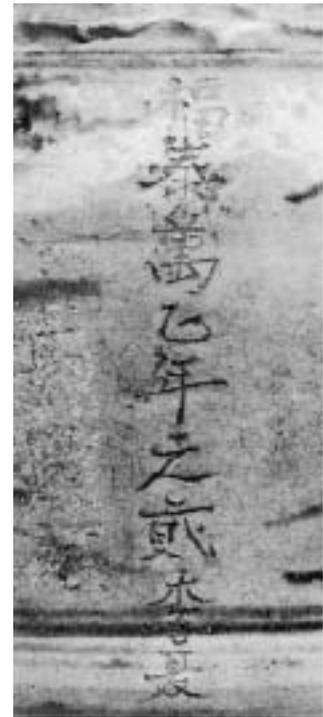


図42 水指B類参考
(カラー図版171頁参照)

まり1630年代から1650年代頃の間と想定しておく。「茶道83」や「茶道84」の水指も「裴富」に近い人物による製作であろう。

「南海322／根津72／茶道87」、「原色108／根津70」も水指の器形として異なるが、類似した型から起こした龍文が貼り付けられていることから、近い時期に生産されたものであろう。

「南海322／根津72／茶道87」（図40）の水指は末次平蔵の船の長として乗船していた大沢家当主四郎右衛門が1633年の渡航時に持ち帰ったという。水指B類が1630年代にバッチャン社で生産された可能性は高いだろう。

水指C類

根津69／茶道88 安南紋手龍文耳付水指（図43）

京都国立博物館蔵

水指B類に属させることも可能であるが、「粗略なように思われる³⁷⁾」とあるように、胎土も灰色であると記される³⁸⁾。このような筒型の蓋付き壺は、ベトナム国内においてそれほど出土するものではないが、龍文、スタンプ文、貼付文はベトナム国内流通品にも見られるものであり、注文生産ではないかもしれ



図43 水指C類

37) 西田宏子・鈴木裕子 前掲注16) 187頁。

38) 所謂ベトナムでバットダン（瓦質施釉陶器）と呼ばれる、赤色や灰色の胎土に白化粧を施す資料であり、17世紀に胎土が次第に灰色～黒灰色そして赤色となる。バットダンの最初期の資料であろう。

ないので別類型とした。水指B類の「原色108／根津70」とは肩部と口縁部の器形が類似し、外面下部の如意頭スタンプ文は薄くて見えにくい、類似している。時期的にも近い年代が考えられよう。

水指D類

水指の体部を球形に作り、体部上方に凸線を2本施し、線間に小さな花形貼花文を6ヶもしくは4ヶ並べている。把手として、蜥蜴のような動物を二カ所につけている。

茶道81 安南絞手耳付水指

茶道82 安南絞手耳付水指

Louise Allison Cort 1997³⁹⁾ : Fig.7 安南絞手耳付水指

「この作風の壺はベトナムの伝統的な器として造られ日本で水指にみだてられたもの⁴⁰⁾」とあり、現代の茶人からみても異国風という印象があるのだろう。「茶道82」と「Louise Allison Cort 1997 : Fig.7」は器形が非常によく似ており、同時期の資料であることが理解できる。貯蔵用の壺は焼締め陶が主に用いられ、施釉磁器製壺はベトナム国内においても出土が稀である。高台内の鉄錆はこの時期ほとんど見られず、明らかに高級品であり、注文生産の可能性があると考える。

8. 水注

南海323／茶道86安南寿字水注（図44） 京都国立博物館蔵

同類のタイプがベトナムにも見られる⁴¹⁾。貼り付け文は16世紀末から17世紀に流行するが、この水注は大沢家当主四郎右衛門が持ち帰ったものであるため、17世紀前期に位置づけておきたい。



図44 寿字水注

9. 花入

1点1点、器形や文様が異なり、グルーピングすることが難しいが、便宜的に長い胴部を持つ花入をA類、器体が3-4段で構成され、3段目（もしくは2段目）が袋状にふくらみをもつ形状のものをB類、角瓶状のものをC類とした。

花入A類

茶道69 安南染付龍文花入、南海19 銘白衣

ベトナム陶磁器の中でも大変珍しい資料であり、他に類例がない。ラマ式蓮弁の2、3本のうちの1本の線を太く描くのは、ある一時期にしか現れない。トプカプサライ美術館の大和八年（1450年）銘を

39) Louise Allison Cort 前掲注4) 72頁 Fig.7。

40) 茶道資料館 前掲注14), 257頁。

41) Bui Minh Tri and Kerry Nguyen Long 前掲注29) 442頁, no.319

もつ天球壺も太いラマ式蓮弁の線がある。4弁の花弁をもつ文様は、ホイアン沖沈船にも見られ、15世紀後半まで続く文様であることが指摘できる。足部の波頭文および、ラマ式連弁内のパルメット文様は、元染付を模倣した陶磁器に多くみられるが、文様が鈍くなっており、元染付の模倣陶磁器より年代が下ることが推測できる。また、このタイプの波頭文とラマ式連弁は、ホイアン沈船の陶磁器には確認できない。よって、この花入は、ホイアン沈船より遡り、ベトナムで元染付が模倣される14世紀後半の陶磁器より年代を下り、15世紀前半に位置づけられる。

花入B類

文様はそれぞれ異なる。

「根津11」安南染付雲龍文花入（逸翁美術館）は、口縁部に貼り付けられた花卉、ラマ式連弁の中に渦巻文を縦に繋げて渦巻きの外周に点や線を描く文様などは、16世紀後半に多く見られる。また、龍文の体部や鱗は、1587年を持つ燭台⁴²⁾のモチーフに類似するため、16世紀後半に位置づけてよいだろう。

「根津14」安南染付花唐草文双耳花入（香雪美術館蔵）も、珍しい資料である。Bui Minh Tri 2002: 398, no.255と文様の各区画に使われるモチーフが似ている。16世紀に位置づけられる。

「根津13／茶道70」の安南絞手龍文花入および「根津12」の安南染付龍文花入は、呉須の滲み方、「根津13」の貼花文、龍文の描き方から17世紀の初頭に位置づけたい。

「茶道71」安南絞手耳付花入は、器形はやや異なるが「根津12」の文様構成に類似する。龍文の耳には緑釉が施されている。青花陶磁に緑釉が施されることは大変珍しいが、17世紀前半には燭台に貼花文を張り巡らし、所々に緑釉を施すスタイルが流行る。またビンロウ樹の実を噛むときに用いる石灰壺の17世紀例にも緑釉が上部にのみ施されている。

花入C類

南海324／町田109 染付狩獵文双耳花生（図45） 出光美術館蔵

町田市立博物館（2001）⁴³⁾が指摘するように、口縁下に描かれた宝珠文は、根津87の安南絞手龍文耳付水指の文様と類似する。また貼花文は、Bui Minh Tri 2001: 434⁴⁴⁾と類似する。17世紀前期に位置づけられることで間違いのないだろう。このような方形の花瓶は、ベトナムには確認できないことから、西田（1984）や町田市博物館（2001）が指摘したように注文生産の可能性が高いだろう。



図45 花入C類

10. 茶入

茶入は、4点それぞれ器形や文様も異なるため、一点ずつ紹介する。

42) Nguyễn Đình Chiển 前掲注24) 130-131頁

43) 矢島律子「作品目録」『ベトナムの青花——大越の至上の華——』（町田市立博物館，2001）102頁。

44) Bui Minh Tri and Kerry Nguyen Long 前掲注29)。

「根津89」安南色絵花文茶器（赤絵小壺）は、線で区画され六角形の中に描かれた草文は、ホイアン沈船資料に類似する文様が確認できる。また、赤色で×を描き、その空間に緑色の点を描くモチーフや肩部の蓮弁文もホイアン沈船に確認できる。しかし、文様はホイアン沈船資料よりも若干簡略化しており、器形もホイアン沈船出土小壺より肩部や腰部の張りが少ないことから、ホイアン沈船よりやや年代の下る資料であると考えられる。またクランアオ沖沈船資料の赤絵の文様ほど退化していないので、クランアオ沖沈船の年代よりは年代が遡るだろう。従って、15世紀末から16世紀最初期に位置づけるのがよい。



図46 草花文茶入

「根津90」安南染付文字入り茶入は、ベトナムでは珍しい器形であり、注文生産の可能性が高い。呉須の滲み方や貼花文から17世紀前期に位置づけられる。

「茶道89」安南絞手牛人物文茶器について、ベトナムで風景画が陶磁器に頻繁に描かれるようになるのが16世紀であり、また肩部の波濤文も16世紀にみられる。器形としては大変珍しく、17世紀前期に注文生産した可能性も残しておきたい⁴⁵⁾。

「茶道90」安南絞手草花文茶器（図46）は、本来茶器ではなかった⁴⁶⁾と考えられている。側視した草花を描く文様は16世紀にみられるため、16世紀に見立てて日本へ持ち帰られたか、17世紀の前期に注文生産として作陶された可能性がある。

11. 香炉

「茶道91」安南絞手竹文香炉の1点のみである。これも茶入れの「茶道90」と同じ根拠から、16世紀もしくは17世紀前期に位置づけられる。

第2章 日本出土のベトナム茶陶の分析

伝世した茶陶と同タイプのベトナム陶磁が日本で出土している。それらは、すでに廃棄されてしまったものである。また、伝世した茶陶の中に同タイプの資料は確認できなかったが、出土地点や共伴遺物群から茶陶として使われたと考えられるベトナム陶磁器についても言及する。

2-1. 伝世したタイプと同類の茶陶

1. 白磁肩部蓮弁貼花文壺（水指 A-1 類）

東京大学埋蔵文化財調査室の富山藩上屋敷跡から白磁肩部蓮弁貼花文壺が出土している。これは、非

45) 今まで上述してきたすべての製品において注文生産品と考えられる陶磁器が17世紀前期であり、16世紀に確認できないことから17世紀前期の注文生産という記述をした。

46) 茶道資料館 前掲注14) 259頁。

常に強く火を受けており、看護婦宿舎地点の第三遺溝面巨大な採土坑 SK299より出土している。この地点は、1639年の富山藩成立により上屋敷に、それ以前は加賀藩の下屋敷に含まれていた。SK299の覆土は一部焼土層で形成しており、火災の年代は、1683年以前に位置づけられると推定されている⁴⁷⁾。この白磁水指が廃棄された年代の下限は1683年となる。

2. 安南染付海老文茶碗（図21、22：茶碗 K 類）

伝世した茶陶の中では、最も数の多かったタイプの茶碗であるが、日本出土例は1点のみ長崎市金屋町遺跡より出土している⁴⁸⁾。金屋遺跡出土の茶碗（図21、22）は、体部から口縁部にかけて筒状に成形し、口縁部外反せず、高台部は比較的細く作られる。施釉後、高台接地部が削られている。釉薬は焼成不良ではないのに発色が悪い。施釉範囲および白化粧の範囲は、高台接地部を除くすべてであるが、非常に薄く施され透明感なく釉化されていない。胎土は白粒、黒粒を含む硬質な灰白色である。親指により軽く一度凹まされる。凹みが小さく、女性の親指がはまるほどなので、成形したのは女性なのではないかと考える。当例は発掘区 B3、C3 地区から出土しており、17世紀初頭を下限とする層位より出土している⁴⁹⁾。

3. 安南染付皿

伝世茶陶には9点あり、日本出土の同類資料も、確認できた範囲で、京都市左京三条二坊十六町に青花龍文菊形皿が1枚、堺環濠都市遺跡では青花龍文皿片と青花龍文輪花皿片が1点ずつ、大阪城でも青花龍文皿が1点、長崎市金屋町遺跡では青花龍文皿1点（図48）、青花龍文輪花皿2点（図47）、青花笠文皿1点（図33）、計8点に及ぶ⁵⁰⁾。支焼具痕が見込みに3点もしくは4点観察される。器形は類似するが、文様や口縁部の装飾、高台部調整においてヴァリエーションがある。

最も多く出土が確認できた金屋町遺跡は、長崎港に隣接する丘陵の一角で、港を見下ろす高台上にあたり、海運の利用に良好な位置である。1592年頃、町が建設されたが、江戸時代の古地図が残っていない。当該地点の居住者については分かっていないが、近接する箇所には長崎の代官職を務めた村山等安（?～1619年）の屋敷があった⁵¹⁾。4枚の青花皿については、土壙7（18世紀代）より1点、土壙14（17世紀中葉から18世紀代）より2点、土壙49（16世紀後半から17世紀初頭）より1点出土している。出土層位は違うが、上述した安南染付海老文茶碗を含め、すべて発掘区南西の石垣に囲われた敷地内から出土

47) 成瀬晃司「医学部附属病院看護婦宿舎地点発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査年報1 1996年度』（東京大学埋蔵文化財調査室、1997）21頁。

48) 長崎市埋蔵文化財調査協議会 2002『金屋町遺跡——オフィスメーション（株）ビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』

49) 第Ⅲ期を4層相当とし、17世紀初頭に起こった大火後の生活面から3層による整地（盛土）がなされる以前までの時期が中心であり、第Ⅳ期を5層位かから地山までとし、16世紀末頃の今町の町建て当初から17世紀初頭に起きた火災層を用いた整地の遺溝面が中心である。長崎市埋蔵文化財調査協議会 前掲注48)。

50) この他にも同様の絵柄皿が数枚出土しており、まとまった出土数を示すという（長崎市埋蔵文化財調査協議会 前掲注48）38頁。

51) 長崎市埋蔵文化財協議会 前掲注48）1頁。

することから、廃棄年代は異なれども、この敷地内に居住していた世帯が使用し、伝世し、廃棄されたものであろう。当初は同一人物が所持していたであろうと推察する。また、同じ敷地の石垣内から、53点（ベトナム長胴瓶が52点、ベトナム瓶が1点）、囲いの外には、ベトナム長胴瓶が19点、瓶が3点出土している。また石垣外側には、印判手碗1点が出土している。居住者は村山等安などと関係した可能性も考えられ、ベトナム貿易にも強く関わっていた人物であろう。

染付皿は4点共、釉も胎土も同じである⁵²⁾が、施釉範囲や高台の削り方がそれぞれ異なることが確認できる。例えば、図47は、高台の削りが角張り、外面体部下部まで施釉され、施釉範囲より上部に白化粧が施される。図48は、高台接地部の削りを細かく何周も轆轤回転を利用して削っている。釉は高台接地部まで、白化粧は高台接地部以外全てに施される。「長崎市埋蔵文化財協議会 2002、No.61⁵³⁾」は、高台接地部以外全面に白化粧が施され、釉は、体部下部までのみ施される。このように、釉薬や白化粧を施す範囲や、高台削りの方法が異なるということは、一人の陶工が生産したものではないことが理解できる。

大阪堺環濠都市遺跡では、SKT 3 地点において16世紀中頃から後期にかけての遺溝から出土した⁵⁴⁾ 資料

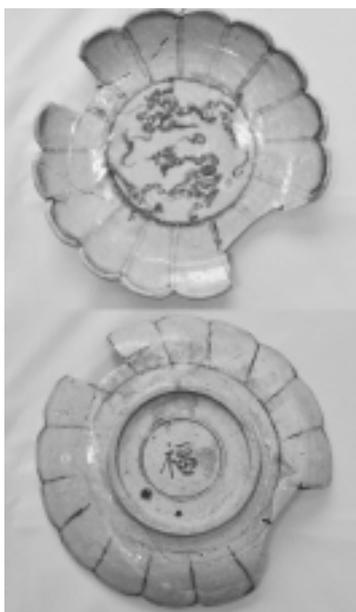


図47 青花龍文輪花皿
長崎市金屋町遺跡出土



図48 青花龍文皿
長崎市金屋町遺跡出土

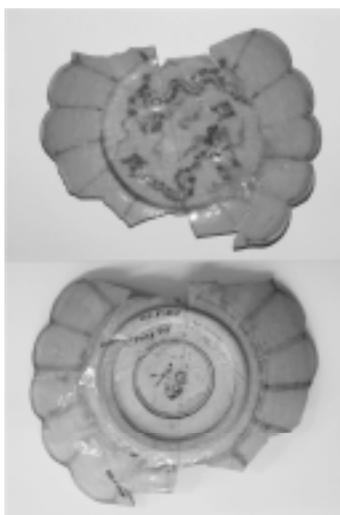


図49 青花龍文輪花皿
堺環濠都市遺跡
(SKT528地点) 出土



図50 青花龍文皿
堺環濠都市遺跡
(SKT 3 地点) 出土

52) 釉は貫入あり、透明感あり、やや灰黄緑色かかる。胎土は非常に硬質で、白色粒を非常に多く含む。

53) 長崎市埋蔵文化財協議会 前掲注48)

54) 續伸一郎「堺環濠都市遺跡出土のベトナム陶磁」『近世日越交流史——日本町・陶磁器』（桜井清彦・菊池誠一編，2002）286頁。当類型の染付皿の年代観が、筆者の年代観とずれるために見直す必要がある。

として位置づけられている（図49、50）。

2-2. 茶陶に使用したと考えられる日本出土ベトナム陶磁

伝世品としては確認できないが、発掘調査により出土し、茶陶に使用されたと考えられるベトナム陶磁について言及する。5類が認定でき、16世紀の初頭に位置づけられる青花葉文碗、大分で多く出土する白磁印花碗、大津城出土の青花劃花印花碗、17世紀前半に位置づけられる青花龍文茶碗、同じく17世紀半に位置づけられ粗製の青花皿および鉄絵皿である。

1. 青花葉文碗（図51、52：西村・西野分類輪状釉剥ぎI-1及びI-2類の同じ文様のタイプ）

体部から口縁部にかけて滑らかに外反するのが特徴的な碗である。また何より、体部に描かれた変わった葉文もこの器形にのみ現れる。葉文の他に、鳥文もよく描かれる。ベトナムではよく出土するタイプであるが、日本出土例は4点のみであり、日本例4点には全てこの葉文が描かれている。高台部は上部が厚く、下部は細く、高台内は垂直に削られる。釉は接地部まで施されている。

興味深いのは、出土地点が鹿児島県諏訪之瀬島切石遺跡、大分県竹田市久住町小路遺跡、長崎県瑞穂町陣の内遺跡、沖縄県今帰仁の今本地点であり、他ベトナム陶磁の出土地点が、大名が所在した遺跡や大型港市遺跡であるのとは対照的である。

陣の内遺跡出土ベトナム陶磁は、長崎県の南部島原半島の北麓に位置する。瑞穂町に属し、遺跡は有明海から500mしか離れておらず、海が見渡せる地点である。内外面全域に白化粧と釉が、高台内には全面にチョコレートボトムを施される。輪状の釉剥ぎを持つ。高台接地部は摩滅でつるつるしており、よく使用されていたことが分かる。当遺跡からはベトナム陶磁の他、タイのスコータイ産陶磁器も出土



図51 青花葉文碗
鹿児島県諏訪之瀬島切石遺跡出土

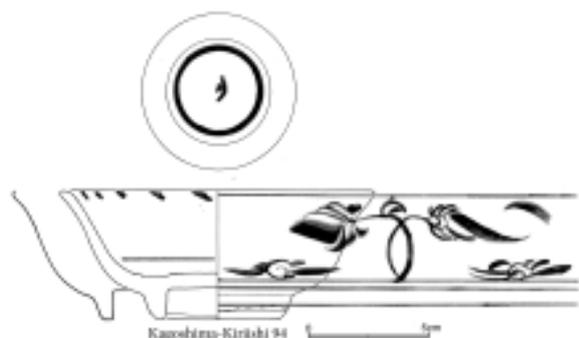


図52 図51資料の実測図

している。陣の内遺跡のすぐ近くには、鍵峰遺跡があり⁵⁵⁾、城を築いた人物との関わりも考える必要がある。

55) 長崎県教育委員会『長崎県埋蔵文化財調査年報9 [平成12年度調査分] 長崎県文化財調査報告書 第164集』(2002)

ろう⁵⁶⁾。

小路遺跡は、大分県竹田市久住町大字仏原字小路に所在する。遺跡の標高は610m前後で遺跡からの眺望が良く、南東の芹川下流方向に遠く大分県郡方面を望むことができる。小路遺跡出土の土師質土器の分析から、府内大友城下町で多く出土するタイプの土師質土器の出土し、製作技術が酷似することから、大友氏が管理下におく土器製作集団が製作したものか、もしくは大友氏の土器製作工房から工人を派遣して製作したものと推定され、大友氏との政治的な結びつきを指摘している。当地域は朽網氏が領していたが、天正14年（1586年）、朽網氏は島津軍の豊後侵入の際に島津方についたためその後断絶する。考古学的調査の成果から、周囲に小規模な館や寺院を伴う地方領主クラスの館であり、館の開始年代は15世紀後半代で、盛期が16世紀前葉から中葉前後までであり、最終年代が16世紀中葉から後葉にかけてで、島津軍の侵入年代まで下がる可能性が高い。朽網繁貞の時代は、大友16代政親、17代義右の加判衆に名を連ねており、大規模な館造成にふさわしい実力者とされる。繁貞の戦死のあとを継いだ親満も加判衆を努めたが、20代義艦の時の1516年に朽網氏はいったんと途絶える。入田氏から養子に入り跡を継いだ鑑康も、加判衆になるなど、その実力は島津の豊後侵入まで続く⁵⁷⁾。考古学的成果と文献史から、大友氏との関連性が強い館で、その最終年代が16世紀中葉から後葉にかけてであり、盛期が16世紀前葉から中葉であることも、ベトナム陶磁の年代が16世紀前半に納まることを裏付けている。この他、華南三彩や高麗壺も出土しており、大友館跡で出土例と類似する遺物が出土している。

諏訪之瀬島は、九州本島から南西に約204kmの洋上にあり、トカラ列島のほぼ中央に位置する火山島である。切石遺跡からは海に対しての眺望が絶好であり、切石港は古くからの船の発着場であることを考えあわせると、切石遺跡の立地はまさに船による交通を意識した地点に営まれていたといえるだろう⁵⁸⁾。碗の出土量が多く、明らかに茶陶だと考えられる天目碗や唐津も多く出土しており、ベトナム青花碗も茶陶として使用された可能性がある。

この3点は、九州の地方の地方領主クラスの人物が関わった地点で出土し、小路遺跡と諏訪之瀬島の青花碗においては共伴遺物群から茶陶として使用された可能性は十分考えられる。また、流通は公的なものではなく小規模で私的な交易（後期和冠など）であったことが理解できる。

2. 白磁印花碗（図53、54、55、56）

伝世品としては1点も確認のできなかつた白磁印花碗は、豊後国大友府内から最も多く出土する。こ

32-33頁。

56) 16世紀後半代に機能していた遺跡であり、『日本城郭体系』によると、神代貴茂の家臣の鍵峰七郎の居城といわれるが、鍵峰城跡とされているところは、「宿城跡」であり、鍵峰城跡は、同遺跡の東北東側と考える意見もあるが、陣の内遺跡が鍵峰城跡の近くであることは間違いないようである。城が16世紀後半に機能していたということは、16世紀前半には相当の富があったことは間違いないだろう。

57) 大分県久住町教育委員会『小路遺跡 上屋敷遺跡 県営担い手育成圃場整備事業都野西部築に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』（大分県久住町教育委員会，2000）4，128-147頁）

58) 熊本大学文学部考古学研究室「諏訪之瀬島切石遺跡」『熊本大学文学部考古学研究室研究報告』第1集（熊本大学文学部考古学研究室，1994）1頁。

れが、茶陶として使われたであろうことは坪根（2006）^{59）}に詳しく、大友宗麟の茶の湯に関する逸話は数多く残されており^{60）}、その茶人ぶりは有名である。また、考古学的調査からは、大友府内町跡南半地域の



図53 白磁印花碗 大分県府内12次調査出土

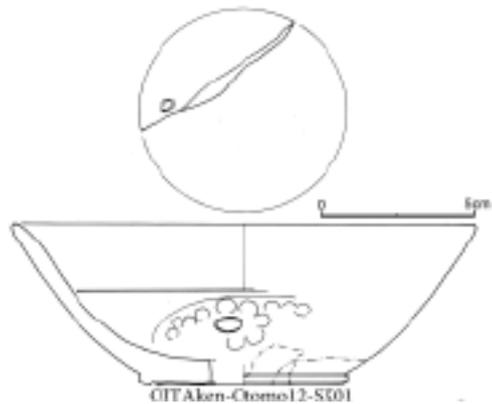


図54 図53資料の実測図



図55 白磁印花碗 大分市大友府内町跡
第53次調査（S200）出土



図56 図55資料の実測図

59) 坪根伸也「大友府内の茶の湯論——豊後国大友府内における出土茶道具からみた茶の湯の様相——」『関西近世考古学研究14——考古学から見た安土・桃山の茶の湯文化』（関西近世考古学研究会，2006）

60) 坪根伸也前掲中59) から、大友宗麟の茶の湯に関するエピソードには以下のようなものが伺える。

- 永禄2年（1559）の久我晴通が宗麟に出した書状には宗麟の手前を所望したい旨が記されており、京都の公家にまで茶の湯の傾倒ぶりが知られていた（『大友家文書』『大分県史料』26 諸家文書補遺2）。
- 天正14年（1586）4月には、宗麟が大坂城に豊臣秀吉を訪ねた際に、千利休が秀吉の問いに対し「（宗麟は）なかなかの数寄者です」と答えたことも宗麟の茶人ぶりの紹介によく引用される（『大友家文書』『大分県史料』33 大友家文書録3）。
- 同時に本人、家中の名物蒐集も積極的におこなわれた。弘治3年（1557）に毛利元就が宗麟の弟である大内義長を攻めた時、元就が義長の処遇を兄宗麟に問い合わせた際に宗麟は弟の助命を請わず、瓢箪茶入を望んだというエピソードものこされている [山口県立美術館，1988]。この時の瓢箪茶入が8代將軍足利義政→村田珠光→武野紹鷗→大内義隆→大友宗麟→豊臣秀吉→上杉景勝に伝わった大名物「上杉瓢箪茶入」である。

ほぼ全域で茶道具を確認でき⁶¹⁾、府内12次調査では、天正十四（1586）年の焼土から三個体以上の白磁印花文碗が出土しており、破断面を漆継ぎにより補修した痕跡があるという⁶²⁾。この白磁印花文碗は、大分の他、大阪、京都、和歌山、愛媛⁶³⁾などで出土する。その出土地点の一つ、堺のSKT47地点においても、白磁印花文は1596～1615年の大火面検出層から福建・広東窯系壺、漳州窯系方形香合、硯、器是と建水、唐津窯系酒杯、備前播鉢（懐石料理用）、朝鮮王朝陶磁黄褐釉碗（蕎麦茶碗）と共伴して出土している⁶⁴⁾。今回の伝世茶陶には確認できなかったが、茶陶として使用された可能性は高いだろう。天正14年に、大友宗麟が島津氏からの圧迫による窮状を豊臣秀吉に訴えた話は有名であり、1586年に大阪城で豊臣秀吉と会見した折にも、千利休が「中々数寄」（『西国盛衰記』）と大友宗麟を評価した⁶⁵⁾ことから、推測の範囲内ではあるが、大友氏が所持する珍しい白磁印花文茶碗が秀吉などの手に渡ったことは十分考えられよう。天正13年（1585）の宣教師の記録には「……国主フランシスコは、何年か前、四カ国が彼の息子の嫡子に服従するのを拒んで、住民が反乱を起してから貧しくなったので、日本で非常に珍重されている彼の或る品を売るため堺の市に送った⁶⁶⁾。（『イエズス会日本報告集』 第Ⅲ期 第7巻）」とあり、1580年ごろには購入どころか所持品を手放さなければならなかった状況が示されている。つまり、大分豊後府内では1580年代の遺構や包含層、整地層に白磁印花文碗の出土例が集中し、同例が出土する和歌山根来寺は1589年焼亡とされる⁶⁷⁾が、白磁印花碗が大友府内にもたらされた時期に関して、坪根（2006）が示すように⁶⁸⁾主に、第1a期（1573年から1578年）もしくはそれ以前に、茶陶の収集が行われたのだろう。1586年の島津氏の侵攻により大友氏が破れ、衰退の一途をたどることは有名であるが⁶⁹⁾、1578年の日向高城・耳川の闘いでの敗戦によるダメージは大きく、上述するような、財政難から名物類を手放さねばならない状況に陥った⁷⁰⁾。

・江戸時代に編纂された『大友興廢記』には、新田肩衝等14点の茶器と玉潤作の絵画をはじめとする絵画・墨蹟19点が宗麟所持として記録されている。一方で、こうした財力にまかされた蒐集活動も必ずしもすべてが思惑どおりに運んだのではなかった。博多の島井宗室が所持していた檜柴肩衝を宗麟が強く望んだが、宗室に断られ実現していない（『島井家文書』『福岡県史』近世史料編福岡藩町方（1））。

61) 坪根 前掲注59)

62) 吉田寛「陶磁器からみた大友南蛮貿易」『戦国大名大友氏と豊後府内』鹿毛敏夫編（高志書院刊，2008）328頁

63) 吉田 前掲注62) 328頁。愛媛県湯築城周辺の城下町とされる道後町遺跡で出土しているという。

64) 森村 前掲注9) 263頁

65) 吉田寛「戦国期の大名茶人・大友宗麟の大友氏館跡」『淡交』第58巻第5号，No.712（2002）75-79頁。

66) 文章の続「……それは柘榴位の大きさで小さく、釉ぐすりをかけた茶碗で、或る種の葉を挽いて粉にしたものを入れるために用い、一般に何かの度毎に熱湯を加えて飲むためのものである。この貴重な宝物のことを、日本の最大、最良の地の領主羽柴筑前殿が聞き、日本中で有名な器だったため非常に欲しがり、その器のために一万五千クルザードを出すことにし、さらに好意を示すためその代金を非常に遠い豊後まで、陸路山口の国を通して運ぶよう命じた。」

67) 吉田 前掲注62) 328頁。

68) は、都市構造変遷を0段階から6段階設定し、その第5、6段階以降をさらに第I a（1573年から1578年）、I b期（1578～1586年）、第Ⅱ期（1586～1602）、第Ⅲ期（1602年以降）に分けた。

69) 天正14年（1586年）、府内は島津軍により悉く焼き尽くされたことが宣教師の記録にあるという。坪根伸也前掲中59)

70) 坪根 前掲注59)

交易に関しては、吉田（2008）に詳しく、1540年代から1560年代にかけて府内に5度にわたるポルトガル船の寄港記録、1550年代に宗麟が後期倭寇の中国側の首領である王直らを利用して対密貿易を実施した試み⁷¹⁾、1573年に発給された「大友氏奉行人連署書状」から、大友宗麟らが南蛮貿易のために中国南部から東南アジア諸国をも射程において貿易船を海外に派遣していた事実⁷²⁾を指摘している。つまり、16世紀半ばから豊後に白磁印花文碗がもたらされた可能性が高いことがわかる。

大分で出土している白磁印花碗は高台型式および重ね焼き技法により2種類が確認できた。一つは、円盤形トチンを用いた重ね焼き（図53、54）、もうひとつは口縁重ね焼（図55、56）である⁷³⁾。

3. 滋賀県大津城出土外面劃花青花碗（図57、58）

外面劃花青花碗は、滋賀県大津城出土より出土している。大津城は天正14（1586）年、豊臣秀吉の命により現在の浜大津一帯に築かれた城である⁷⁴⁾。このベトナム陶磁は、第三包含層（16世紀後半から17世紀初頭の年代が与えられる）より出土している。第三包含層は本丸築城時の埋め立て土の直上の、大津城廃城後の整地層であり、信楽平水指（もしくは建水）、志野向付、瀬戸の天目茶碗、瀬戸美濃の水指、明染付碗、李朝平茶碗などの茶道具が共伴しており、このベトナム外面劃花青花碗も茶道具として用いられたことが指摘されている⁷⁵⁾。ベトナムでも大変珍しく、日本については大津城が唯一である。器体は非常に薄いのが特徴的で、釉は全面にかかるが、口縁部と高台接地部周辺は“なで”（削りではない）により無釉である。外面には、ヘラ削りによる蓮弁刻花、口縁下部に2本線のヘラ削り線が施され、内面には花文が比較的鮮やかな青色のコバルトで、細かい線が丁寧に描かれている。内面中央と口縁下部にコバルトの圏線が施される。高台型式からは、16世紀後半に位置づけられる。共伴遺物の土師器皿20点がすべて16世紀後半に位置づけられていることから、16世紀後半にこのベトナム青花碗が使用されたことも間違いなからう。



図57 外面劃花青花碗
滋賀県大津城跡出土

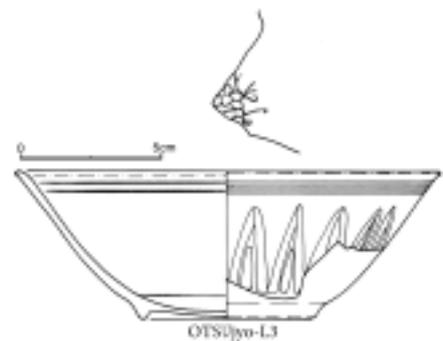


図58 図57資料の実測図

71) 吉田 前掲注60) 337-338頁。鹿毛 2006「十五、十六世紀大友の対外交渉」『戦国大名の外交と都市、流通』（思文閣出版、2006）より引用。

72) 吉田 前掲注62) 309-310頁

73) その違いが年代差であると考えられ、ポルトガル船、後期倭寇、大友宗麟の貿易船という運ばれた手段との関連性も含めて今後詳細に研究したい。

74) 大津市教育委員会 2003『大津市埋蔵文化財調査報告書（29）大津城跡発掘調査報告書ー浜大津公共駐車場・スカイプラザ浜大津建設に伴うー』大津市教育委員会

75) 吉永眞彦「大津城跡1600年一括茶陶」関西近世考古学研究会例会、2006年6月24日発表レジュメ

4. 大阪城出土青花龍文碗（図59、60）

ベトナム龍文青花碗が大阪城 OF92-18次調査地（修道町1丁目に所在）より出土している。この碗は、ベトナムでも多くはないが確認でき、ハイズオン省ホップレー窯から鉄絵龍文碗が出土している⁷⁶⁾。17世紀前期の高級品である。龍文は皇帝に関連する陶磁器であると考えられている。この龍文碗を商人などが見立てて持って帰ってきたのだろう。その青花碗は、第4b層上面より検出されたSK411遺溝より出土し、同じ土壌から、ベトナム焼締壺も出土している。1時期前の第4c層上面で検出されたSK403はSK411のすぐ隣の遺溝であるが、同遺溝から、4点のベトナム中部産長胴瓶と波状文を持つ球形壺、そして徳川初期の国産陶磁器や中国陶磁器が出土している。他、この敷地に住んでいた人が海亀の甲羅や鼈甲を扱っており、葉種として搬入されていることから、輸入業を営んでいた可能性が非常に高い⁷⁷⁾ という。



図59 青花龍文碗 大阪城出土

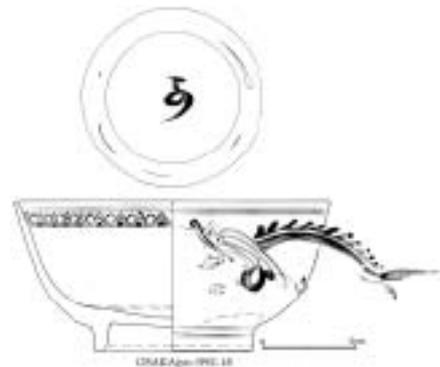


図60 図59資料の実測図

5. 粗製のベトナム青花、鉄絵皿（図61、62）

石川県の金沢広坂遺跡において、まとめてベトナムの青花皿が出土した（図61）。金沢城の南側に位置する武家屋敷であり、この青花皿は寛永大火（1631年、1635年）の年代を下限とする、年代のわかる良好な資料である。17世紀前半の居住者について記す資料は残されていないが、武家が居住したことが推測されている⁷⁸⁾。金沢城下町の武家屋敷で数枚まとめて皿が使用されたということは、懐石具として用いられたのだろう。他に、類似したタイプの陶磁器が長崎や堺環濠都市などでも出土している。堺環濠都市では、1615～1630年に廃棄された層より出土している⁷⁹⁾。これも年代の下限を1635年に押さえられる貴重な資料である。



図61 青花・鉄絵皿
金沢広坂遺跡出土

76) Bui Minh Tri and Kerry Nguyen Long 前掲注29) 239頁, no.231)

77) 大阪市文化財協会『大阪城跡Ⅱ』2006

78) 庄田知充「石川県広坂遺跡・高岡町遺跡と出土陶磁器 ヴェトナム青花などと産地不明の褐釉四耳壺」『貿易陶磁研究』（2003）No.23:23-29.

79) 續伸一郎 前掲注54) 286頁。

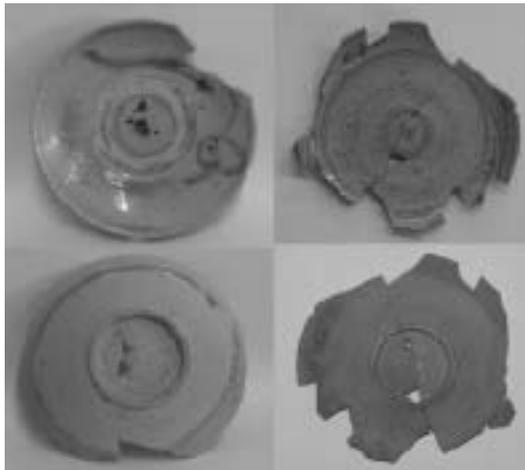


図62 青花・鉄絵皿 堺環濠都市遺跡出土

第3章 ベトナム茶陶の分析から復元する歴史的背景

第1、2章で記した、各茶陶の年代観を俯瞰すると、ベトナム産茶陶の生産年代は、14世紀、15世紀、16世紀前半、16世紀後半（第3四半期と第4四半期）、17世紀前半に分けることが可能である。以下、茶陶から、明らかにできた歴史的背景を論じたい（表1参照）。

A. 17世紀初頭にもたらされた14世紀の年代をもつ茶道具

14世紀以前に位置づけられる茶陶には、茶碗A類の白磁劃花蓮弁深鉢（図1）と水指A類の白磁肩部蓮弁貼花壺（図39）がある。14世紀に位置づけられる6点は、ベトナムでもよく流通した陶磁器類である。壱岐、対馬、大宰府、博多で14世紀の陶磁器が多量に出土するが、博多で黄緑がかる透明釉の外面劃花蓮弁深鉢（甌）が出土する程度で多くみられるものではない。

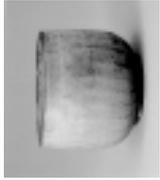
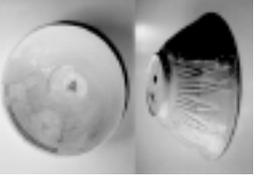
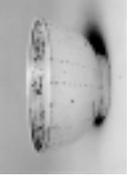
ベトナムでの陶磁器の購入はどのように行われたのか。それを知る良好な資料が、京都下鳥羽の大沢家当主四郎右衛門（～1639）が一括所持するベトナム陶磁である（図39、40、43、44）。すでに茶道資料館が指摘するように、4点のうち連弁文水指（図39）は14世紀の古作が持ち帰られ、他は17世紀初頭のものであり、安南絞手龍文耳付水指は注文に応えた作である⁸⁰⁾。四郎右衛門は、末次平藏の船の長として乗船したとされ、1633年に交趾に船を出している。安南国の洪郡公時代である徳隆五年（1633年八月）の書状によると、四郎右衛門光中は洪郡公から日本の貨物を購入するための銀を預かり、翌年それを届けたという⁸¹⁾。同じ作風の白磁連弁水指が、現東京大学本郷キャンパスにあった富山藩の上屋敷もしくは加賀藩の下屋敷に比定される敷地内から出土し、1683年の年代を下限としている。

また、14世紀の白磁碗2点のうち、1点是小堀遠州が所持、もう一点は神尾蔵帳に記載されたもので、小堀遠州の三男の権十郎が箱書している。2点の類似する作風のもの選ばれて日本にもたらされたの

80) 茶道資料館 前掲注14)：258-259

81) 西田宏子 前掲注2)：120)

表1 ベトナム茶陶の編年案（茶碗）

14世紀		茶碗 A 類						
15世紀末		茶碗 B 類						
16世紀前半		茶碗 C 類		出土資料 1 鹿児島県諏訪瀬島				
16世紀前半				出土資料 2 大分 大友宗隣関連遺跡				
16世紀後半		茶碗 F 類		茶碗 G 類		茶碗 I 類		茶碗 J 類
16世紀後半						出土資料 3 大津城		
17世紀前期		茶碗 K1 類		茶碗 K2 類		茶碗 M 類		茶碗 H 類
								茶碗 L 類
		長崎金屋町遺跡						出土資料 4 大阪城

だろう。上述の14世紀の年代をもつベトナム陶磁は、すべて、17世紀のコンテクストをもつため、17世紀にベトナムにおいて14世紀の古作を茶道具と見立てて日本に持ち運ばれたのは間違いないだろう。

B. 徳川家所蔵の非常に稀なる高級品

15世紀に位置づけられる陶磁器は沖縄では多く出土しているが、日本列島本土での出土例はない。柳営御物の安南染付龍文花入は、ベトナム染付の最盛期である15世紀の中でも、特に稀なる高級品である。徳川家所蔵品に関しては、他に、茶碗E類と茶碗F類（図9）の紅安南茶碗があり、これもまだ他では類を見ず、珍重品、高級品として、日本に持ち運ばれたことは間違いないであろう。今回確認できた限りで、龍文花入や紅安南を徳川家のみが所有しているということは、非常に限定された入手方法によるものと理解できる。これは、15世紀～16世紀に日本に運ばれたものを、徳川家が所持したか、朱印船貿易により、骨董品である珍重品がもたらされたのかのいずれであろう。龍文花入は数奇者大名であった土屋相模守（政直1641-1722）から、将軍家に献上されたものであり⁸²⁾、17世紀に請来された可能性も高い。また、紅安南も当時の最高級の茶道具を大名などが徳川家に献上した可能性もあろう。

C. 16世紀前半——倭寇との関連性か後の時代の見立てか

16世紀前半に位置づけられるものは、茶碗C類の安南染付蓮弁文茶碗、茶碗D類の安南白釉碗、「根津89」の安南色絵花文茶器、そして長崎雲仙の陣の内遺跡、大分竹田市小路遺跡、鹿児島諏訪之瀬島切石遺跡、今帰仁今本地点で出土した青花葉文碗が挙げられる。伝来由来の分かるものが、八代の松井家の茶碗、そして出土地が分かるものが今帰仁の1点の他はすべて九州である。16世紀半ばには、倭寇による密貿易が指摘されており⁸³⁾、これらのベトナム陶磁の流通も、倭寇による小規模な限られた交易による可能性がある。まだ「安南焼」と名づけられなかった頃から先駆けて九州で茶道具として使用された可能性もあろう。

D. 高台が播られた茶碗について——細川家と松井家の関係——

今回扱ったベトナム茶陶の中で、図6（茶碗C類の安南染付蓮弁文茶碗：「根津108」）、図17（茶碗J類の安南染付壽字茶碗：「根津111」）、図26（茶碗L類の安南染付筋文茶碗：「根津99」）の3点のみ、高台が播られている⁸⁴⁾。ベトナムでの高台型式には見られないものであり、非常に珍しい。高台成形後、施釉後に糸切りなどで削られた可能性よりは、西田・鈴木が指摘するように、「播られた」のだろう。この3点に関する非常に興味深い点は、図6が松井家伝来、図17と図26が細川家伝来ということである。八代城主である松井家は肥後細川藩の筆頭家老を務め、細川家とともに文化芸能に造詣深い家柄であった

82) 茶道資料館 前掲注14) 254頁。

83) 中島楽章・桃木至朗「『交易時代』の東・東南アジア」『海域アジア史研究入門』（桃木至朗編、岩波書店、2008）90-97頁。

84) 「根津96」の14世紀に位置づけられる安南白釉茶碗も高台は播られている（西田宏子・鈴木裕子 前掲注16）：196）とあるが、14世紀の深鉢（Au）に分類される高台型式にこの資料のように低い高台をもつものがあり、実見していないので断定はできないが、播られていない可能性がある。

という。これらの茶碗3点は、細川家と松井家の非常に強い繋がりを示す物的証拠である。また、どちらかは分からないが、細川家、松井家の好みの現れでもあり、入手した茶碗にさらに手を加えて自分の好みにした。図6が16世紀前半、図17が16世紀後半、図26が17世紀前半であり、同時に高台接地部を低く平らに削ったならば17世紀前半以降だろう。

E. 大友宗麟が所持した白磁印花碗

嘉靖36（1557）年頃、沿岸の海賊討伐の助力を契機に、ポルトガル人はマカオへの定住とこの地での公益活動を許可された⁸⁵⁾。また、1540年代から1560年代のポルトガル船の府内への寄港記録、1550年代の後期倭寇を利用の可能性、大友宗麟の貿易船による交易の事実などから、宗麟が、九州という立地の優位性を生かして、海外の情報をいち早くキャッチして実行していたことがわかる。次のFで示す交易の拡大以前に、宗麟は独自のルートで海外とのつながりを持っていた。大阪城、堺、京都、和歌山で出土している印花白磁碗が大分から運ばれた可能性も高いのではないだろうか。

F. 16世紀第4四半期の交易の活発化と好みの変化

16世紀末にはポルトガル人が広東、福建沿岸で密貿易に参入し、やがて寧波近海の双嶼にポルトガル人・中国人・日本人が結集し、密貿易の一大拠点が出現し、さらには「後期倭寇」がかえって東南沿海に拡大していった⁸⁶⁾。つまり、16世紀末にベトナム陶磁がまとめて日本に運ばれる背景があったようだ。茶碗G類、茶碗I類の高足碗、茶碗J類の安南染付壽字茶碗、花入B類安南染付雲龍文花入（根津11）、安南染付唐草文双耳花（根津14）らが、その時代に運ばれたものだと考える。

谷は詳細な茶会記の研究から、天正年間に茶人の道具使用に大きな変化があり、天正14年（1586年）前後をその画期とし、背景に利休によって主導された新しい「数寄」理念による茶道具に対する評価替があったことを指摘している⁸⁷⁾。「東山名物」を初めとした唐物嗜好から、和物や朝鮮陶磁への変化である⁸⁸⁾。そのような茶人の嗜好の変化の時期と、国際交易の東南アジア地域への拡大と、そしてベトナムで茶人好みの染付が生産されていたという偶然性が重なって、もたらされたものがこの時期の茶陶であろう。

G. 朱印船貿易時代のベトナム茶陶

17世紀前期、朱印船貿易時代のベトナム茶陶がもっとも多く伝世しており、この時代の盛んなベトナムとの密接な交易関係が伺える。

85) 矢野仁一 1928: 100 岡美穂子 2008「ヨーロッパ勢力の台頭と日本人のアジア進出」『海域アジア史研究入門』桃木至朗編、岩波書店: 98-106より引用。

86) 中島・桃木 前掲注83) 91頁。

87) 谷晃 2001『茶会記の研究』（淡交社、2001）。

88) 谷晃 前掲注79) 199頁

1) 注文生産された茶碗の形

今回指摘した注文生産品とされる安南染付茶碗、茶碗K類（図19、20）、茶碗N類（図23、24、25）は、注文生産品であり、ベトナム国内で流通しているタイプと器形が異なることは既に述べた。これらに共通するのは、筒形の所謂「半筒茶碗」であることである。日本の桃山から江戸時代の志野や織部、楽茶碗、京焼きなどといった茶碗の多くが、口縁部を直行させる筒型の形をしていることから、これらのベトナム陶磁器も筒形を意識して注文されたのだろう。また、碗の円形を故意に歪ませることや、割高台は、当時の日本人の茶人の好みや流行を大いに反映している。ベトナムの飯茶碗は、口縁が開く器形をもつ伝統がある。ただ、17世紀初頭にベトナム国内で流通する碗に、口縁が直立する無地の茶碗があり、それは、逆に日本の注文生産の形に影響を受けたのかもしれない。

茶碗N類（図28、29）に関しては、碗を深く、高台を高く裾広がりには作出するなどいわゆる呉器⁸⁹⁾と類似する。肥前においては、1637年に取り潰されたと考えられる天神森窯などからも呉器を模倣した茶碗が出土している。高麗茶碗を意識したことが明らかな碗は、寛永年間（1624～1644年）に多く見られるという⁹⁰⁾。また、京焼においても17世紀に高麗茶碗が模倣されたことが論じられている⁹¹⁾。高麗茶碗の写しの流行を反映して、この茶碗N類が注文されたのであろう。

つまり、17世紀前期に注文された安南染付茶碗は、正に、当時の日本茶道界での嗜好を反映している。天正年間に茶人の嗜好が変化し、その後朱印船貿易時代に日本人がベトナムの地に居住し、安南絞り手が日本人の注文で生産された。「安南焼」の誕生は、コバルトで文様を描く技術がまだ残っているベトナムの窯業村の存在、在ベトナム日本人の巧みな注文という、様々な要因が重なって成立したことになる。

2) 生産地比定の可能性

茶碗K類のK1類（図19、20、21）とK2類（図23、24、25）の違い、また水指B、C類（図40）と水指D類の違いが、時期の違いではなく、生産地の違いによるものだと考える⁹²⁾。当時、バッチャンとハイゾンで生産が活発に行われていたが、「バッチャン（鉢場）社裴富多造」と銘記された燭台の獅子と連弁の貼花文とほぼ同形の貼花文が貼り付けられた水指が、水指B類にあることから、水指B類はバッチャンで生産された可能性が高いだろう。また水指B類の「茶道87」は「明らかに日本の注文に応えた作⁹³⁾」とされ、ベトナムでもこれらの文様、器形をもつ陶磁器が出土しないことから、注文生産として

89) 禪院で使用していた御器と称する漆塗碗に形が似ていたからつけられたとか、朝鮮の食器を意味する五器に由来しているとか言われているが、茶の湯の伝承の常として形があるわけではない（谷晃 前掲注79）268頁。しかし、大振りで見込みが深く、高台が裾広がりになる朝鮮陶器を呉器と呼んでいるようである。

谷晃 前掲注87）268頁によると、茶会記に「呉器」を初見するのは、『近江孤蓬庵蔵小堀遠州茶会記』の寛永八年（1631年）であるというが、寛永十八年の可能性もあり、他には、『松屋九重茶会記』の寛永十二年にも登場する。遅くとも寛永の中頃までには入ってきたとされる。

90) 大橋康二「肥前のやきものと高麗茶碗」『高麗茶碗——論考と資料』（高麗茶碗研究会編、2003）160頁。

91) 岡桂子「京焼のなかの高麗茶碗」『高麗茶碗——論考と資料』（高麗茶碗研究会編、2003）189-201頁。

92) 筆者は出土資料以外、この茶陶の胎土や釉薬を実見できておらず、ベトナムおよび日本出土資料分析の経験と写真資料からの形式や様式からの分析となるが、伝世資料を実見する機会があれば、研究を深めたい。

93) 茶道資料館 前掲注14）258頁。

まちがいなかろう。水指C類の「茶道81」は、「ベトナムの伝統的な器として造られ、水指に見立てられた⁹⁴⁾」という指摘があるが、ベトナム国内でも出土例や伝世例が確認されていないことから、注文生産であると考ええる。茶碗については、茶碗K1類が、茶碗の注文の仕方が細部に亘った細かいものであったと考えられるのに対し、K2類は文様などベトナム的なものを残している。水指D類も茶道関係者が「ベトナム伝統的な器」と思わせるほどベトナムの当時の様式を留めている。

仮説ではあるが、呉須のじみ方や注文生産の仕方などの共通性から、茶碗K1類、水指B、C類がバッチャンで生産され、茶碗K2類および水指D類が、ハイズオンで生産された可能性を提示しておく。

3) 17世紀初頭に請来された器種について

第1章を振り返ってみると、ベトナム茶陶には、茶碗から、建水、皿、深鉢、平鉢、盃台、水指、水注、花入、茶入と様々な器種があることがわかる。つまり、17世紀前期に、茶碗だけでなく、茶道具のあらゆる器種を注文して生産させたことがわかる。逆に言えば、注文生産だからこそ、あらゆる器種の茶陶が存在すると考えられる。

4) 17世紀初頭のベトナム陶磁の生産状況

ベトナムでは17世紀頃から上質な碗皿が生産されなくなり、高級品は燭台や香炉に生産エネルギーを集中したと考えられる。日本人が渡ってきたころ、ベトナムの窯場で精力的に生産していたのは、これらの大型製品であった。現在でもベトナム人は寺や神社へ、金銭や陶磁器などの貴重品を寄進する。Nguyen D.C. (1999) が示すように⁹⁵⁾、16世紀終わりから17世紀終わりにかけて青花文と貼花文を施し、生産者、生産年代、寄進者を刻んだ燭台や香炉が多く生産された。茶陶の水指や花入には、ところどころに燭台や香炉の貼花文が貼り付けられている(図41と図42など)。そしてその燭台や香炉の生産地はバッチャン窯であり、また、ハイズオン系の窯であった。注文生産と考えられているベトナム陶磁も、やはり、当時のベトナム国内における流行を反映していた。

5) 注文生産の担い手はだれか——バッチャン(鉢場)の阮氏と和田理左衛門——

バッチャンとハイズオンで、注文生産が行われていた可能性を指摘したが、特に、バッチャンにおいては、非常に細かい注文のもと、茶人好みの茶道具を生産させている可能性が高い。一体、誰がその注文生産の担い手なのだろうか。

トンキン国王の側近として、貿易家として活躍した和田理左衛門(1667年トンキンで死亡⁹⁶⁾)の女孫が、バッチャン社の阮氏に嫁いだという史料(家譜)がある(図63)⁹⁷⁾。和田理左衛門とバッチャン阮氏

94) 茶道資料館 前掲注14) 257頁。

95) Nguyễn Đình Chiển 前掲注24)

96) 永積洋子『朱印船』(吉川弘文館, 2001)

97) バッチャン社阮氏についての資料としては、漢喃研究院所蔵の『阮族家譜実録』及び子孫が保存している『阮氏家譜』があるが、『阮族家譜実録』には「日本人署衛事義郡公之女孫」、『阮氏家譜』には、「理左衛門参督署衛義郡公之子」と記述が異なる。理左衛門の子とすれば、理左衛門が1667年に死亡しているのに対し、著は1671年出生

との深い関係が、この家譜から分かる。孫の嫁いだ相手、阮做は、武官であり、総兵士の職にあって、林寿侯の爵位を持っていた⁹⁸⁾。阮做の父阮炳（1637-1682）は、著の父親である忠祿侯の家で死亡したという⁹⁹⁾。忠祿侯は、バッチャンの近隣に住んでいたのだろう¹⁰⁰⁾。また、阮炳の父親である阮言（1614-1673）は、1654年に郷試三場に合格している。その後推挙されて鉢場社の長となり、鉢場社の有力者となった。阮炳も郷試三場となり、その後は北国司通事に属して金洞県丞、文江県県丞を歴任しており、阮言の三男、阮賑は宦官となっている¹⁰¹⁾。阮言の次男、阮勝（1640-1693）は、府県レベルの地方官として官途を経るものの、生業を継承し、その四男と五男が科挙の進士に合格している¹⁰²⁾。

1632年に、大沢家当主四郎右衛門が注文生産の水指を持ち帰っているわけであるから、1632年以前には既に、バッチャンにおいて日本からの注文生産があったのは確実である。現在においても、茶人好みの茶道具を陶工に注文するには、非常に細かい指示をしなければ、良質なものが作れない。実際に日本人がバッチャンにおいて茶人好みの陶器製作を指示した人間がいるはずであり、和田理左衛門こそが、このバッチャンにおける「安南」製作に関与した人物ではないだろうか¹⁰³⁾。当時阮氏は、阮言とその父阮印（1577-1633）の時代であり、阮言の次男が窯業を継いだという

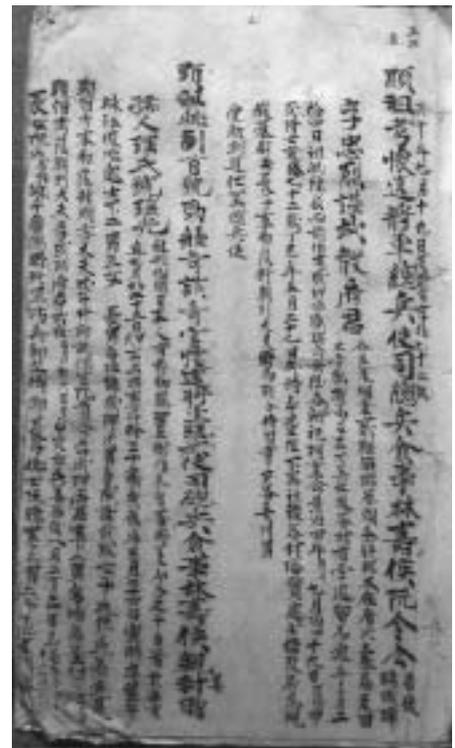


図63 鉢場（バッチャン）社阮氏家譜
（カラー図版170頁参照）

しているので、矛盾が生じるため、出生が1611年の間違いではないかと考えた（西野範子「17世紀バッチャン社に嫁いだ日本人女性について」『東南アジア埋蔵文化財通信 第7-8号』2004）が、阮氏について研究する上田氏私信によると、「氏の科挙官僚2人の登第年から、60年ずれることはあり得ない」ということであり、やはり、孫とするのが正しいのであろう。

98) ファンダイゾアン（大西和彦訳）「17世紀のあるベトナム——日本人家族について——バッチャンの『阮氏家譜』を通じて——」『近世日越交流史——日本町・陶磁器——』（柏書房、2002）89-93頁。

99) 上田新也「ベトナム黎鄭政権の地方統治——十七～十八世紀鉢場社の事例」『近世の海域世界と地方統治』（山本英史編、2010年）汲古書院 257頁

100) 『国朝詔令善政』巻三、礼属上に見える慶徳二年五月（1650年）の外国人雑処禁令で、鄭氏治下への中国人に対し、居住交易の地を青池、勸良等社に指定している。藤原利一郎『東南アジア史の研究』（法蔵館、1986）243頁。青池（Thanh Tri）、勸良（Khuyen Luong）はバッチャンの対岸に位置している。そこに外国人が居住することは可能だっただろう。

101) 「17世紀後半、鉢場阮氏が国際性を帯びるのは、理氏著の祖父である義郡公と阮賑が接点となった結果である」とするが、それ以前に、陶磁器注文生産での関わりから、阮氏と親密な関係になり、阮賑を鄭王府の財務担当に引っ張ったのではないだろうか。

102) 上田 前掲注99) 256-257頁。

103) 「1638年、カチョウにくる絹織物を手に入れるため、ハルティングが商館を建てる許可を国王に求めたところ、国王はこの工事を理左衛門に命じているので、この時期に彼はすでに国王の側近だったことが分かる」（永積洋子 前掲

ことが史料から分かるように、阮印、阮言も窯業を営んでいたであろう。日本の大名が挙って所有した「安南」が高く売れたことは想像に易く、相当な財産を得ることができたであろう。官界に進出するためには相当な経済力が必要であり、阮氏が17世紀前半に窯業で経済力を貯えたとする上田の見解と合致する。

おわりに

以上、茶陶で用いられてきた、ベトナム陶磁「安南」について、伝世茶陶と考古学的資料との双方から俯瞰し、器形や形式、型式、文様様式から類型別に分け、年代比定を行った。比定年代に基づき、各時代におけるベトナム産茶陶の特徴と茶陶がもたらされた経緯や生産の背景を論じ、また茶陶の交易史についても加論し、ベトナム茶陶の歴史的環境の復元に挑戦してみた。今後研究を発展させるならば、伝世茶陶の細かい製作技術の分析から生産地の具体的同定などを行えば、より具体的な歴史議論につながるであろう。また、各遺跡出土のベトナム陶磁に関して、今回はすべての日本出土ベトナム陶磁器に対して行うことができなかったが、共伴遺物群を詳細に研究していけば、具体的に使用した人物や流通・使用の問題が見えてくるはずである。

謝辞

赤沼多佳先生には、茶道資料館で研修させていた時代よりお世話になり、「安南」という言葉がもつその響き、その浮かぶイメージの重要性を教えていただき¹⁰⁴⁾、資料掲載にあたり大変お世話になりました。また、坪根伸也氏には大分市の考古資料および史料など多岐にわたるアドバイスを、上田新也氏には、バッチャン村の家譜についてご教示いただきました。その他、扇浦正義氏、佐々田学氏、竹田市文化財管理センター、甲元眞之先生、山野ケン陽次郎氏、辻田直人氏、吉田寛氏、吉水眞彦氏、続伸一郎氏、大阪市文化財協会、庄田知充氏、田上勇一郎氏、Louise Cort氏、谷晃氏、矢島律子氏、NguyenVan Thanh氏、故LeDo氏、大西和彦氏、元廣ちひろ氏、大阪市美術館、永青文庫、松井文庫、茶道資料館、愛知県美術館、静嘉堂文庫美術館、根津美術館、京都国立博物館、出光美術館、徳川美術館、大和文華館の皆様には、資料閲覧などにあたり大変お世話になり心から感謝申し上げます。西村昌也氏には、様々な角度からの多く教示いただきました。改めて御礼申し上げます。なお、「ベトナムの茶陶」をテーマに平和中島財団の奨学生として1995年より2年間ハノイに留学させて頂き、鹿児島、大分、博多、長崎出土のベトナム陶磁器の調査にあたり、高梨学術奨励基金の研究助成「17世紀から20世紀におけるキムラン・バッチャン村の窯業史」の一部を使わせていただきました。記して感謝申し上げます。

注 論文の中で、(37頁)とあり、1638年以前から既に多才を発揮して活躍していただろうが、1638年以前の理左衛門に関する資料が少ない中で、阮氏家譜における理左衛門の資料および、陶磁器生産に関与していたという論は重要である。

104)「安南」=「南を安んずる」という中国がつけた名前は、ベトナム史からみれば、好ましくない呼び名であった。前掲注25)参照。